

The background of the entire image is a collage of Japanese textile patterns. The top half features a dark blue fabric with thin, horizontal, multi-colored stripes. The bottom half features a red fabric with a complex, repeating geometric pattern in yellow, blue, and green. The text is overlaid on these patterns.

企画展

日本の藍染め

プレインカの染織

企画展の魅力をご紹介します！

一階ホール左手に入ると

ペルー南海岸で少なくとも数百年前に作られた大きな織物があります。白っぽくなっている斑点は、何かで縛って染まらないようにしている部分（絞り）です。この技法は、日本で言えば古墳時代から室町時代くらいまで使われました。そのため寄託者から預かる前に年代測定をしました。果たしていつぐらいのものだったのでしょうか？



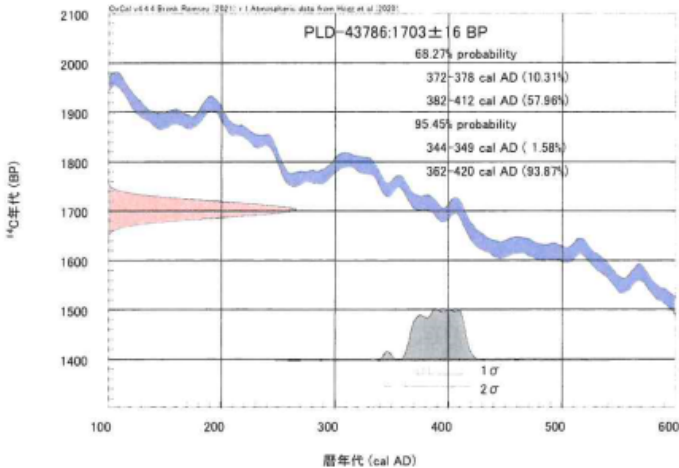
生物の体には炭素(ほとんどが炭素12、炭素14は少量)が含まれます。

→うち重い炭素14は、放射線を発してふつうの窒素(窒素14)になって安定します。本来あるはずの炭素14がどのくらい減っているか調べればいつ頃のものかわかります。

植物の繊維や動物の毛で作られた織物の年代もわかります。測定したところ、4世紀中ごろから5世紀前半の布であることが判りました。日本で言えば鎌倉・室町時代のイカ文化ではなく古墳時代のナスカ文化のものであることが明らかになりました。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-43786 試料No. 1	-18.49 $\pm$ 0.13	1703 $\pm$ 16	1705 $\pm$ 15	Atmospheric data from Hogg et al (2020): 372-378 cal AD (10.31%) 382-412 cal AD (57.96%)	Atmospheric data from Hogg et al (2020): 344-349 cal AD (1.58%) 362-420 cal AD (93.87%)

測定の結果、得られた年代値のうち、2 σ 暦年代範囲に注目すると、試料 No. 1 (PLD-43786) は 344-349 cal AD (1.58%) および 362-420 cal AD (93.87%) で 4 世紀中頃～5 世紀前半の暦年代を、試料 No. 2 (PLD-43787) は 49 cal BC-6 cal AD (52.25%) および 12-64 cal AD (43.20%) で紀元前 1 世紀中頃～紀元後 1 世紀後半の暦年代を示した。



(株)パレオ・ラボによる。

1階に展示された布の時代

ペルー ナスカ文化(ナスカの地上絵)

日本 大阪の天皇陵

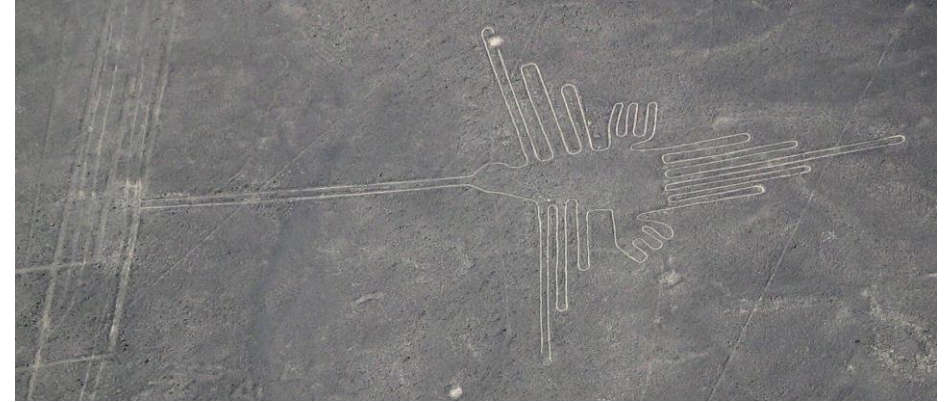
埼玉県 さきたま古墳群



(CC0)



(GFDL:MLIT)



(CC-BY-SA3.0)

ふじみ野市 はそう型須恵器
(権現山北古墳群)



2階の展示(その1)



埼玉県歴史と民俗の博物館から提供いただいた藍の栽培、藍の役の作り方の写真展示です。

春に植えた藍は雑草取りと防虫の世話をし8月～9月に2度刈りこみ(収穫)をおこない、干してから12月ごろまで一週間から10日ごとに切り返してまぜて20度～40度位の温度を保ちながら発酵させます。発酵させてから藍玉をつくり、藍玉を藍がめの中で溶かして藍液をつくります。

※写真はクローズアップできませんので資料館にて直接ご覧ください。

2階の展示(その2)

埼玉県歴史と民俗の博物館から提供いただいた藍の染め方の写真展示です。

染めてから空気にさらして色を安定させます。藍の色は甕のぞき→浅黄→納戸と染めるごとに濃くなることを展示しています。



2階の展示(その3)



染料の色を表す布のサンプル展示です。
奥左から;茜、玉ねぎ(鉄媒染)、玉ねぎ(銅媒染)
手前左から;コチニール、オリーブ、スオウ

日本でもペルーでも赤に関しては茜の染料が使われてきました。またナスカの時代(日本では古墳時代に当たる)からサボテンに寄生するカイガラムシ(コチニーヤ)をつぶしてコチニールを使うようになりました。



サボテンに寄生するコチニーヤ(灰色部分)
(CC-BY-SA2.5)

2階の展示(その4)

染料の紹介が終わるといよいよアンデスの6000年にわたる染織の歴史の紹介です。

藍染めは、紀元前4000年ごろのペルー北海岸のワカ・プリエッタ遺跡から出土した布が現在のところ世界最古とされていますが、ペルーでは藍をはじめ様々な染料が使われました。特に鮮やかな赤については、アカネの一種の根からとった染料、カイガラムシのコチニーヤからとった染料があり、それらの染料で染められた布は、リヤマ、アルパカ、ビクーニャなどの動物の毛を織り込んだもので芸術的な美しさで知られています。



古代アンデスの機織りは、古くはナスカと同時代のモチェ文化の土器に描かれ、インカ時代の風俗習慣を絵入りで記した『ワマン・ポーマの記録』にもみられます。後退機や原始機と呼ばれるものです。



リヤマ(CC-BY-SA3.0)



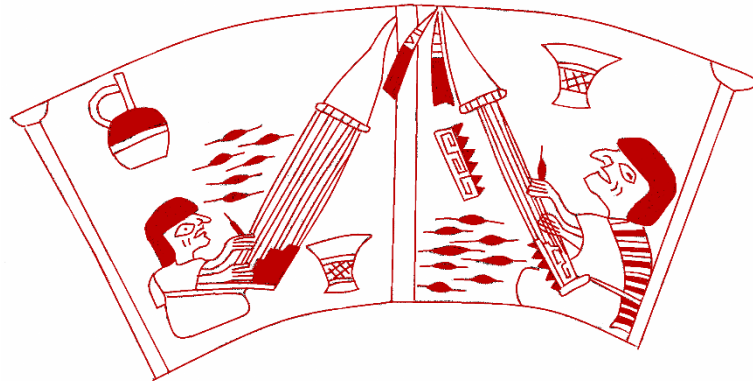
ビクーニャ(CC-BY2.0)



インディゴ(コマツナギ属)
(CC-BY-SA3.0)



アルパカ(CC-BY-SA3.0)



モチェの土器に描かれた機織り(5～7世紀ごろ)(GFDL)

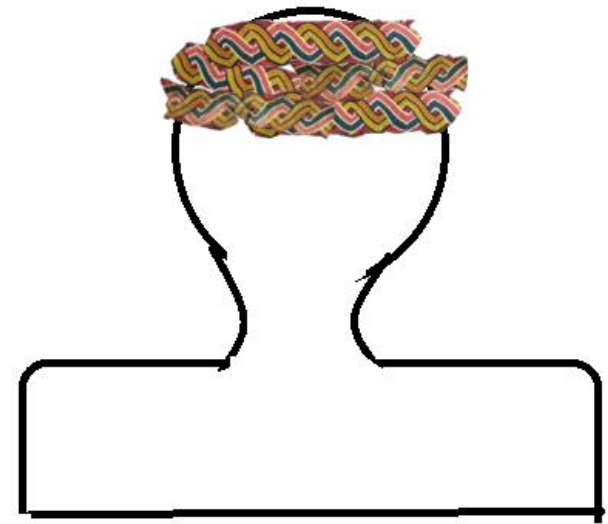


ワマン・ポーマの記録
(PD)

パラカス貴族のターバン

紀元前1世紀～紀元後1世紀くらい(日本では弥生時代)のペルー南海岸では、当時の日本に似て小規模な勢力がいくつもある社会でした。そのリーダーたちは、神話的な神々や動物の文様を織り込んだ素晴らしい織物をまとい、さまざまな文様の織物をターバンのように巻いていたようですが、この織物のような絡んだヘビの文様の帯も代表的なもののひとつでした。当時はコチニールが普及していなかったので、赤い色は茜の一種である植物の根から染料をとっていました。

※論文などでは、支配層、有力層、首長層を「エリート」と書くようですが、よりイメージしやすいよう便宜上「貴族」とします。



ナスカ戦勝首級の織物

北海岸のモチエ文化に比べて一見平和そうなナスカですが実際にはかなり戦争が行われていたようで戦争に勝った際に首狩りを行い、豊作を願う儀礼で丁寧に埋葬されました。首級は土器にも描かれ、織物には首級の飾りがつけられました。

(白く囲った部分のクローズアップ)



ナスカの神話的存在

ナスカ文化では、ジャガー、ピューマなどのネコ科動物やシャチなどの強い動物を神格化してそれを様式化した文様が土器や織物につけられました。

人物をかたどった土器にこのような織物を肩からたらしたり、腰に巻いているものがみられます。

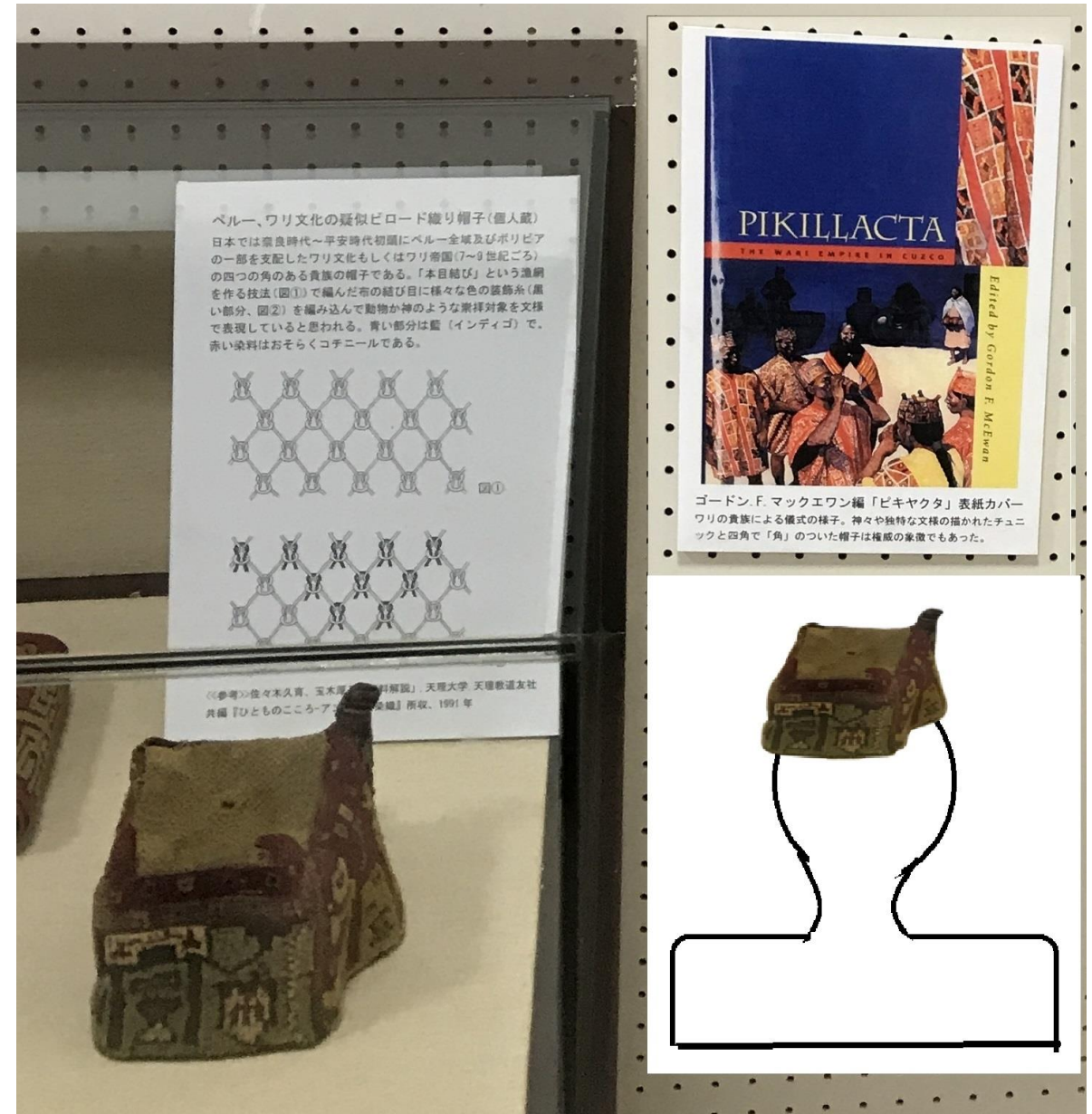


クリーブランド美術館所蔵の
ナスカの土器 (CC-BY-3.0)



ワリ貴族の帽子

7～8世紀ごろ(日本の奈良時代ごろ)のペルーは、両手に杖を持つ神などのシンボルで知られるワリ文化(街道の整備など大規模な統治機構を想起させることから帝国説もある)の影響が広範囲に及び、当時の有力層は、独特な文様の衣をまとい四つの角のある帽子をかぶっていたことが知られています。ワリ貴族たちの宴会(政治的な会議を兼ねる)では、おそらくトウモロコシを発酵させたチチャのような酒を使ったのではと思われます。

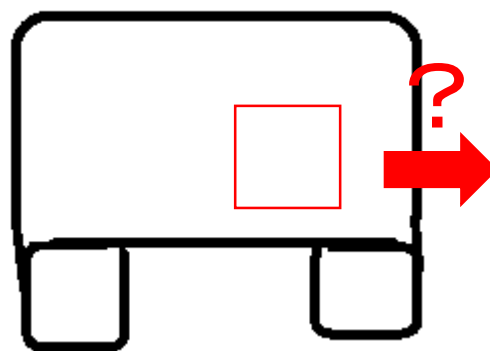


(上) チャンカイ文化の織物(12～14世紀ごろ、日本では鎌倉～室町時代)。階段状のモチーフのマス目に鳥の文様が織り込まれている。赤い染料はおそらくコチニールである。

(下) チムー王国の織物(12～14世紀ごろ、日本では鎌倉～室町時代)。横向きの怪獣の文様。類例があるので当時の帽子の一部かもしれない。赤い染料はおそらくコチニールである。



チムー王国の首都チャンチャン(CC-BY-SA3.0)。地平線まで日干しレンガの壁が広がる大都市で、王様の代替わりごとに宮殿が築かれました。



2階の展示(その5) 大正時代の再現品



機織り部会が小坂部與助(よすけ)家(明治期)、小坂部忠寿家、谷郷太郎(ごうたろう)家(いずれも大正期)の縞帳から再現した藍染めの織物です。明治大正の藍染めが令和の時代によみがえりました。糸をつむぐためのフワリ、座繰り、糸車も展示しています。